



### ペースメーカーに感謝

日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・サビエルが生まれたのは一五〇六年。今年が生誕五〇〇年の節目の年に当たる。それを記念してサビエルの生誕地などを巡礼する旅が企画され、参加のお誘いを受けた。

あとで詳しくふれるが、現在も二つの幼稚園の園長をされるなど極めて多忙な方で、今回行くことをよく承知されたと思うが、頼まれるとなかなかイヤと言えない人の良い神父である。

この神父と一緒に聖地ルルドやサビエル城、ロヨラ城、サンティアゴ・コンポステーラなどを訪ねる巡礼の旅に行くチャンスはそう簡単にはない。妻もぜひ行きたいと言う。しかし、大きな問題があった。昨年、六十五歳にな

り、六月末に退任して四十三年間の長きにわたってお世話になった山口放送での勤務から解放されて自由の身となった。

しかし、実は旅行とペースメーカーの入れ替え手術の時期が重なっていたのである。

昭和三十九年、二十九歳の若さで心臓病を患い、一年間、休職した。

昭和四十二年、六十年間を超えてのロックアウトを招いた労使紛争

は、骨肉の争いとなり、数々の係争事件へと発展した。私は組合の闘士。今思い出しても大変な時期で、それまで病氣一つしたことのない体は一拳にこわれた。厳しい現実から逃避するため酒も飲んだ。何が直接の原因かはわからないが、心臓にいろいろな病名があった。

以来、問題をかかえたままの心臓、平成九年、四半世紀にわたって会社と対立し続けた私のような者が役員に任命された。これ以上迷惑をかけることはできない。思い切って心臓にペースメーカーを植え込

む手術を受けた。最近ではマラソンの中継などでもよく耳にするが、こつちの方は好記録が生まれるように途中まで早いペースで走る人のことである。実はこの言葉は自分では正常に動かなくなった心臓を動かす機械のことで、転じてマラソンでペースを作る人のことをそう呼ぶ。

以前はストップウォッチぐらいの大きさで寿命も三年ぐらいだったそうだが、最近では小型化され、電池の寿命も個人差はあるが八年前後と言われる。精密機械に強い日本でなぜ国産のものが少ないのか不思議だが、すべて外国製。大変高価で、機械と手術費だけで百四十万円近くかかる。



ペースメーカー



リフォームの終わった我が家を祝福して下さるヴィタリ神父

手術自体はそれほど難しくはないが、何と言っても体で最も重要な心臓の手術である。ヴィタリ神父と旅すると、幼稚園の春休みと教会のイースターを迎えるまでのわずかな日程をぬつてのこと、私のために日程を変更するなどできるはずがない。

医師に相談して、旅行に間に合うように手術しようということになり、二月二十日入院して、翌日、手術を受けた。

しかし旅行は実際の旅だけでなく、出発までの準備と、帰ってからの整理をきちんとするかどうかで豊かさが大きく左右される。その点から言えば、今回の巡礼の旅は入院とともに始まったのである。

※ヴィタリ神父は現在は益田教会と津和野教会の主任神父として活躍しておられる。